# 玉川教会たより

NO,459

7月27日

## 納豆もコーヒーも豆

▼かつて在任した教会は、玄関脇に小集会室があり、その奥が、教会・牧師館共用の台所になっていた。日曜日の朝、朝食に例えば納豆が出る。その奥いが玄関に漂う。私は東国の人間なので、何ら抵抗はないのだが、任地は西国、教会員にとって、礼拝が納豆の奥いから始まるのは、納得が行かなかったようだ。牧師館の日曜朝食からは、奥いの強い食べ物は消えた。

▼ある朝、珍しくコーヒーを煎れた。早くやって来た教会員が、「良い香りですね」と言い、自然、「どうぞ一杯」となった。やがて毎日曜日の朝は、コーヒータイムから始まるようになった。いただいた人の多くが、コーヒー豆を差し入れしてくれる。結果、牧師館用も含めて、コーヒー豆は充分にまかなわれた。

▼次に赴任した教会の玄関は、トイレの悪臭がした。建物の構造上、防ぐ術がないとのことだったが、これは我慢出来ない。キリストの香りがトイレの悪臭では話にならない。タイルには良くないと分かっていたが、強烈な塩素系漂白剤をたっぷり注ぎ、徹底的に磨き上げ、その上で、バラやハーブや、香りの強い花を玄関に置いた。結果、ほとんど解消した。

▼寄商売は、玄関とトイレからと言われて来たが、最近の居酒屋は必ずしもそうではないようだ。それは兎も角、「もっと教会を行きやすくする本…「新来者」から日本のキリスト教界へ・著者：八木谷涼子・出版社：キリスト新聞社」は要するに教会の広い意味での玄関入り口を観察し批評した本だ。その

▼著者は、多くの教会を覗いて観察したようだ。これは常人にはできない。まして、牧会者には不可能だ。まじめに一つの教会に通い続ける役員にとっても。だから、他教会の様子を知るにはありがたい本だが、我が教会に採用できるかどうかは別問題だ。

▼「牧会相談の実際…カウンセラーと共に考える・著者：藤掛明、小渕朝子、村上純子・出版社：あめんどう」も、教会の玄関入り口を観察し批評した本ではないだろうか。或いは、人の心の玄関入り口を。だから、そのいちいちの指摘に対して、あるものについては納得し、その通りだなと思うが、ある点

いちいちの指摘に対して、あるものについては納得し、その通りだなと思うが、ある点については、これは一面的な見方に過ぎないのではないかと、反発する。

▼必ずしも共感できない部分について、もちろん事柄にもよるが、説得力のないものがある。玄関入り口といえども、教会の顔なればこそ、ロケーション、構成要員、要には歴史的背景と、多面的な要素がある。これと無関係な玄関入り口はない。当然、新来会者への接し方、つまりは接客についても。教会員同士の交わりのありようについても。

役員にとっても。だから、他教会の様子を知るにはありがたい本だが、我が教会に採用できるかどうかは別問題だ。

▼「牧会相談の実際…カウンセラーと共に考える・著者：藤掛明、小渕朝子、村上純子・出版社：あめんどう」も、教会の玄関入り口を観察し批評した本ではないだろうか。或いは、人の心の玄関入り口を。だから、そのいちいちの指摘に対して、あるものについては納得し、その通りだなと思うが、ある点

については、これは一面的な見方に過ぎないのではないかと、反発する。牧会に関するものだけに、反感はむしろ大きい。しかし、この本の場合、反発を感じる部分で立ち止まらされる。そして、もう一度読み、やっと腑に落ちたり、少なくとも、もっと考えなくてはならない、学ばなくてはならないと、思わされる。

▼例話は当然だが、内容全体が現実、実体験に即していることが、その理由ではないかと思う。実際の生きた教会と教会員の話なのだ。「もっと教会を行きやすくする本」も、構造的には、同じことのはずだが、結局、玄関建物のことであり、表面上の応接のことに過ぎない。

玄関建物よりも、各教会の人の心の方が遥かに多様性に富み、複雑で一概には論じられないはずなのだが、そこに、何故だが共通性が見えてきて、共有出来る事柄が見えてくるのは不思議だ。

▼「もっと教会を行きやすくする本」を辛口に、「牧会相談の実際」は好意的に評したように見えたらごめんなさい。どちらも、役員会等での話合いの教材にふさわしい本だ。

194-0041　町田市玉川学園4の5の32　tel. 042-732-9321